

たかまつまちかど交流館のさらなる活性化

指導教員 石川県立看護大学 看護学部 助教 中嶋知世

教授 紺家千津子・今井秀樹

参加学生 浅谷純菜・泉陽菜・岩田一花・神本 彩耶・稲原寧々・上森美雨・柴愛莉・舩岡 怜奈
大端愛美・菰池真麻・高橋愛結・中島いまり・松浦吏歩

1. 活動の成果要約

かほく市高松の住民とたかまつまちかど交流館の利用者へのインタビューを実施し、結果をもとに作成したアンケートにて、かほく市高松の居住者およびたかまつまちかど交流館の利用者、大学の学生・教職員に調査し、439 部の回答を得た。アンケート結果を NPO 法人まちかど倶楽部たかまつと共有し、現状の課題について意見交換した。現在、たかまつまちかど交流館の利用者の増加を目指して「まちかど保健室」に向けて準備中である。

2. 活動の目的

かほく市においては、過去 5 年間にわたり人口増加が続いている。特に 0～9 歳の小児および 25～39 歳の比較的に若い世代が年々増加している。一方、たかまつまちかど交流館では、利用者の高齢化と固定化が進んでいる。これまでの利用者を維持しながらも、新たな世代を取り込んでいくことが、たかまつまちかど交流館の運営における課題となっている。課題解決に向けた現状の把握のための調査および多くの年代に親しまれる取り組みの提案を目的とする。さらに看護学を学ぶ本学学生と地域住民が触れ合う場としてのイベント「まちかど保健室」を開催し、広い年代間の交流の場とすることを予定している。

3. 活動の内容

6 月：かほく市高松の住民およびたかまつまちかど交流館の利用者へのインタビューを、対面および遠隔にて実施した。たかまつまちかど交流館の利用者へのインタビューについては、NPO 法人まちかど倶楽部たかまつから対象者の紹介を受けた。インタビューでの質問項目は、かほく市高松の住みやすさや地域特性、たかまつまちかど交流館の利用状況について、とした。利用者へのインタビュー以外に、たかまつまちかど交流館についての説明を NPO 法人まちかど倶楽部たかまつの理事の方々から受けた。実際にたかまつまちかど交流館に行くことによって、学生の目線でも利用の課題を検討した。



たかまつまちかど交流館の外観



喫茶スペース



催し物と展示スペース



NP0 法人まちかど倶楽部たかまつの理事の方々から説明を受ける様子

- 8～10 月：インタビューの結果を踏まえたアンケート用紙、および、たかまつまちかど交流館のチラシを作成した。アンケート用紙およびチラシの作成にあたっては、必要な記載内容を NP0 法人まちかど倶楽部たかまつの方々と学生とが遠隔ミーティングで出し合い、学生が素案を作成した。その後、さらに意見交換を重ね、詳細に確認しながら完成させた。
- 11 月：かほく市高松の 2,107 世帯、たかまつまちかど交流館の利用者（Facebook 利用者へ向けた掲載を含む）、石川県立看護大学の学生および教職員に対するアンケート調査を実施した。この際、たかまつまちかど交流館について作成したチラシをアンケートと一緒に配布した。かほく市高松の居住者に対するアンケートおよびチラシの配布については、かほく市産業振興課に広報誌とともに配布して頂くことを依頼し、ご協力を頂き実施した。アンケートの回収方法は郵送法もしくは Google フォームとした。
- 12～1 月：アンケートの結果をまとめ、たかまつまちかど交流館の活性化に向けた課題と対応策について、NP0 法人まちかど倶楽部たかまつと共に、遠隔ミーティングにて検討した。
- 1～3 月：「まちかど保健室」の開催に向けた準備をしている。

4. 活動の成果

1) インタビュー

かほく市高松の住民 9 名および交流館の利用者 3 名へのインタビューを、対面および遠隔にて実施した。

高松の住民のうち、たかまつまちかど交流館を知っているのは 8 名 (88.9%)、利用したことがあるのは 4 名 (44.4%) であった。利用に至らない理由としては、建物の外観から中が見えず何をしているのかが分かりづらい、暗い印象、ドアの造りに入りづらさを感じる、駐車スペースが使いづらい、高齢者のみ利用しているイメージ、回覧板での広報を見ていないため知らない、があった。利用したことのある者は、知人や家族の作品の展示の閲覧、イベントへの参加のためであった。

交流館の利用者 3 名は、交流館の利用を日課とし、利用者同士や職員との交流が刺激となっていた。

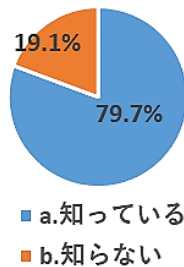
2) アンケート

回答は計 439 部であった。回答者の年齢は 70 代の 103 名 (23.5%) が最も多く、性別は女性が 326 名 (74.3%) であった。交流館を知っている者、回覧板のお知らせを見ている者、利用したことのある者の順に、割合が低下していた。利用に至らない理由としては、何をする場所なのか分からない、一人では行きづらい、入りづらい造りと雰囲気がある、と回答し、一人でも気

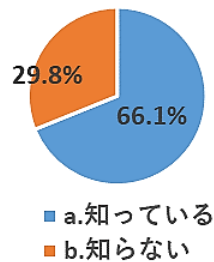
軽に入りやすい造りや雰囲気を求めている。情報発信の方法としては、インスタグラムなどSNSの活用、ターゲット層を意識したイベントの企画などがあった。交流館に求めることとしては、多世代の交流、子連れでの利用、健康・美容に関連した習い事、教養講座などであった。

①「たかまつまちかど交流館」を知っていますか。

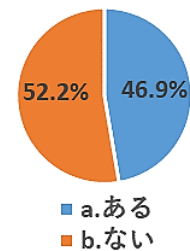
n=439



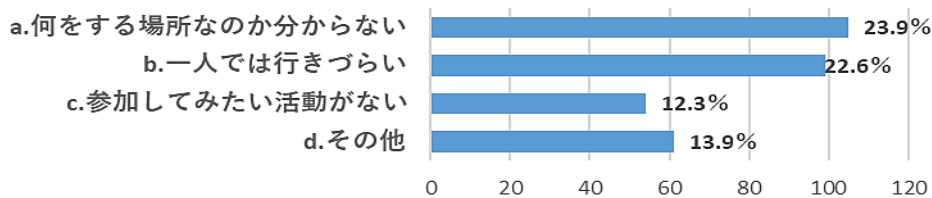
②回覧板に「たかまつまちかど交流館」に関するお知らせがあるのを知っていますか。n=439



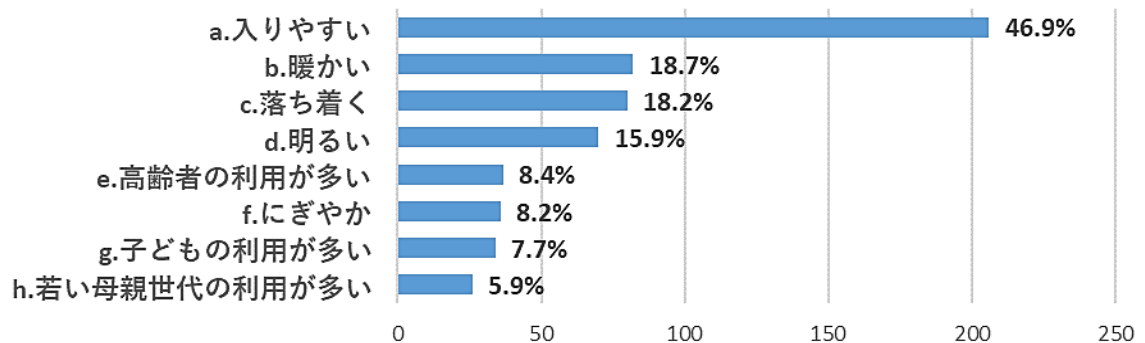
③「たかまつまちかど交流館」を利用したことがありますか。n=439



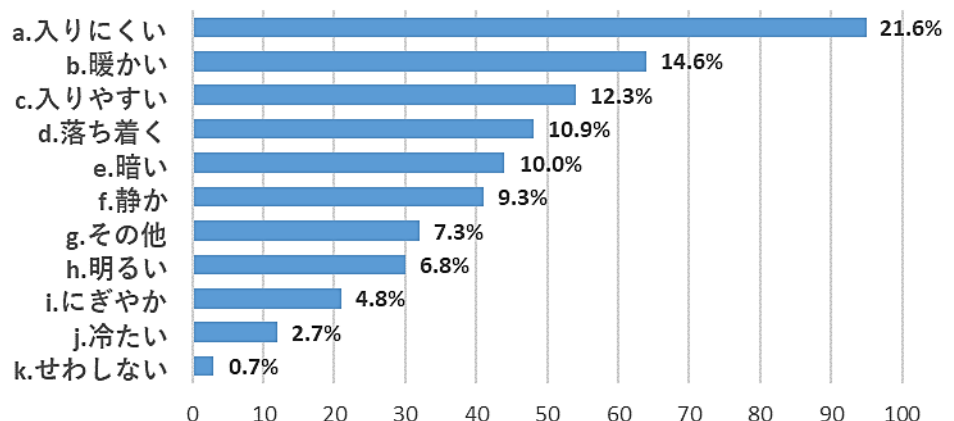
④「たかまつまちかど交流館」を利用しない理由はどれですか。(複数回答可) n=439



⑤どのような雰囲気なら「たかまつまちかど交流館」を利用したいですか。(複数回答可) n=439



⑥「たかまつまちかど交流館」のイメージはどれに当てはまりますか。(複数回答可) n=439



3) 活性化に向けての対策

たかまつまちかど交流館については、よく利用している者の回答内容にポジティブな記載が多く、利用頻度が少ない者や未利用の者ほどネガティブな回答内容が多かった。まずは未利用者の来館を促し、たかまつまちかど交流館を利用してもらうことが必要な状態にある。

現在、たかまつまちかど交流館に関する情報発信の方法は、回覧板・かほく市の広報・Facebookである。ターゲットとする参加者の年齢層に合った情報発信の方法を意識し、バリエーションを増やすことで、新規の利用者を呼び込むことができる可能性がある。例えば、30代～40代といった比較的若い人々に対しては、インスタグラム等といったSNSの種類を増やす。50代以上の世代には、道の駅などの人が集まるスポットに紙媒体を貼付するといった工夫である。

これまで利用者の中心となっていた高齢者の利用を維持しながらも、新たな年代の利用者を取り込むことができれば、たかまつまちかど交流館に多世代が自然と集まることになる。異なる世代が同じ空間で過ごすことにより、自然な流れで、他の利用者である高齢者や子どもなどとの多世代の交流が生まれ、活性化につながると考える。

入りやすい雰囲気づくりについては、特に子どもや若者に対しては、勉強のために自由に使用してよいスペースや、子どもが遊べるスペースを設けて、若い世代からみても気軽に利用しやすい場にしてはどうか。同様に若い世代である本学の学生が日常的に利用する場となれば、各世代に起きている健康課題に興味関心をもちボランティア活動への意欲につながるのではないか。かほく市高松における健康づくりの場としての機能がたかまつまちかど交流館に加わることによる活性化も考えられる。

5. 次年度以降の計画

今後の活動については、NPO 法人まちかど倶楽部たかまつと共に検討していく。

6. 活動に対する地域からの評価

地域住民を対象に広く調査をしたいという思いが実現し、現状と課題がよく分かり良かった。8年前に施工した耐震工事により建物の壁面が増え、中が見えづらく、何をしている所なのかが分かりづらくなってしまった。まずは「入りにくい」から「気軽に入れる」交流館を目指したい。調査結果を市役所の担当者とも共有して、対応を考えていきたい。多世代の交流や若い世代の利用者の増加に向けては、新たなイベントの企画や楽器コンサートでの交流館のPRといった工夫もしていきたい。地域参加型の施設としていきたいため、住民の実現したいことができる場でありたい。そのために、本大学との連携継続を希望するとの評価をいただいた。